

いる時は寝過ごしてはいけなさと目覚まし時計をセツトしていた。今は、時計から解放され、早く起きたときは、本を読んだり、草取りをしたりして朝食に取りかかる。朝から自由気儘だ。

次に一週間以上の旅行にも出掛けるようになった。五月末にはトルコの古代遺跡と料理を楽しんできた。七月には前橋市と東京に住んでいる子ども達のところを訪れた。途中、駒ヶ根や上高地により、車で前橋まで行つた。岩宿遺跡や職場を案内してもらい、東京では私の好きな作家の舞台となつた場所を案内してもらつた。

そして趣味の手芸。最近では九匹の猿が南天の木に乗つた「難が転じて苦が去る」の意味が込められた南天九猿を公民館に集う人々と作ることはまつている。

今年もそろそろフウセンカズラの種が熟す頃である。

五十年ぶりの同窓会

岡山 梅原桂子

昭和三十九年三月高校卒。私たちの同級生は、昭和二十年・昭和二十一年終戦の年と終戦の翌年に生まれた人たちである。高校時代、先生から「あなたたちは人数が少ないから高校へ全員入学できたんだ。だから出来が悪いんだ。」とよく言われた。

そんな高校生も今年古稀を迎える。これを節目に同窓会をしようという話が持ち上がり、私も幹事の一人としてみんなのお世話をした。私が先生

をしていたから適任ということで選ばれたのが、事務方の仕事であつた。

約二八〇名に往復

ハガキを出し出欠の確認、参加者名簿の作成、一〇〇名あまりの不参加者の一言メモ

の記入・印刷、名札作りなど、孫の守りの傍ら教頭時代を思い出しながら準備をした。

当日はあいにく台風一一号が昼前に岡山に最接近し、在来線も止まり、散々な天候だつた。幸い新幹線は動いていたので、福岡・広島・東京・横浜・奈良・名古屋・大阪からも、出席者があり、総勢三五名が集まつた。中には、五〇年ぶりに会う人もいた。ほとんどの人が年金生活に入っているが、中にはまだ現役で桃やぶどうの栽培をしている、介護施設で働いたり、歯医者を続けたりしている人もいた。五〇年の重みを感じながらも、話をしているとすぐうち解けることが出来、一八才の少女時代に帰つて話をする事ができた。若い頃のことはみんなよく覚えていてるなど感心することが多かった。三時間あまり、有意義で楽しい一時を過ごすことができた。

皮肉なことに、夕方には台風風の風も雨も収まり、もう少し台風速度が速ければよかつたのにと、台風を恨んだりもしたが、五年後にまた会を開くこと。それまで元気で頑張ろうと約束して帰路についた。



島根県

転ばぬ先の智恵

松江市 福井 勇

急に雪が積もり、都会などであまり雪に慣れていない人など滑って転ぶ人が多いと記事にありました。

先日のテレビで転ばぬ工夫に、足(靴)の踵から先に着くと滑りやすいので足の裏全体を着いてゆっくり歩くようにとありました。

年の暮れ、雨が上がったので、畑に出かけることにしました。道が濡れていることは承知の上でしたが、ついうっかり足を取られ尻餅をつき、しばらくは立ち上がる気力も出ませんでした。それが元かどうか、年明けから腰痛が続いています。転ばぬ先の杖ならぬ智恵にしたいものです。森脇会長さんも便りによれば、新年早々突然の体調異変が起こつたようです。大事に至らなくて幸いです。

気をつけていても、何時何か起こるかしのれない歳になりました。元気が何より、痛感しています。



今は懐かしき想い出

隠岐の島町 大槻 咲子

今朝も交通安全指導に。交差点に立っていると元氣な登校班の子供達。寒風さす早朝、「おはようございます。」のすがすがしい挨拶の声。「元氣に行つてらっしゃい。」と返す言葉も、つい力が入ってしまいます。

「光陰矢の如し」歲月の流れは早いもの、平成十一年三月、退職の朝「いよいよ今日から自由の身あれも出来る、これも出来る」と胸膨らませたのが昨日のように、懐かしく思い起こされます。

平成七年一月十七日早朝、日本国中を震撼させた阪神淡路大震災も今年で二十年目。人々の心の中から少しずつ恐怖心が薄れ行く中で私には、絶対に忘れることの出来ない、一月十七日午前五時四十六分。

平成六年娘が西宮へ嫁ぎました。温暖で生活環境も最高と心弾ませたものでした。息子も神戸に勤め先を持ち住まいは明石市、ほっと胸を撫で下ろした矢先、予想だにしなかった、阪神淡路大震災。

一月十七日未明、寝室の障子がビリビリと揺れ動いた、すわつ、地震かと居間のテレビをつける。「阪神地方に地震がありました。」とのビッグニュース。はっとした瞬間、けたたましい電話のベル。

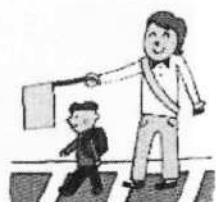
明石の息子から「今、大地震、ベッドから振り

落とされたわ、どうなっているの？」とおびえた声。胆をつぶしました。続いて「電車が動けば隠岐へ避難するので今から駅へ行つて見るよ。」そこから電話はプツツリ、音信不通。それもそのはず、現地は電気、水道等のライフラインは壊滅。幸い明石は震源地より少し離れている事が一縷の望み。

一方震源地にやや近い西宮市の娘はどうだったのだろうか。電話は全くの不通。案じつとも学校へと急ぐ。学校では誰もがテレビの報道に一喜一憂。私達の常識を遥かに越えたまさに、地獄を思わせる大惨事。「身の毛がよだつ」とはこの事をいうのでしょうか。

心身共に疲れ切つて我が家に辿りついても状況は変わらず、食事も喉を通らずテレビに釘付け。夜の十時頃、息子より「今、松江にまでやつと着いたよ。」との電話。家を出て十六時間もかかつてようやく松江に到着。

一人はほっとしたものの娘の安否は皆無。生きた心地のしないまま、只管朗報を祈るだけの数時間、深夜十二時過ぎ娘からの電話。「二人共元氣で社長さんのお宅に着いた。」との事、震災発生から十八時間かかってやっと、箕面の社長宅に辿り着くという混乱状況。



放心状態にあった私達に、あの惨事の最中二人の子供に怪我もなく無事であるとの朗報は、神様、佛様のご庇護の賜物と佛壇の前に脆いていたことだけは、今でも鮮明に覚えております。

平成七年三月には、西郷小学校が県代表としてミニバスケット全国大会に出場、主人はその引率で東京へ、加えて定年退職。私は四月より新任教頭として飯田小学校へ赴任。娘や息子の震災後の生活を案じつとも新任校の勤務、専任教務主任の配置もなくその上に、初任研二類型、新採二人補充教員も二年目、教頭職、指導教員、小規模校の補充授業と新米教頭には、盆と正月一緒に来たような多忙な日々。更に平成八年春、西宮の初孫一歳の友香を余震が落ちつくまで預かることとなり、三人の新生活の始まり。

主人は雨の日も風の日も雪の日も孫と自転車で保育所通い。私は新米教頭、戸惑いの中での学校生活。家に帰つても孫の世話。「お母さんお母さん。」と泣く孫を宥め賺してやつと寝付き、ほっとする生活の連続ではありましたが、心はいつもルンルン気分。

「赤信号はストップ、青になった、はいスタート。」「赤いバス、白いバス、恰好いいね。」「カラスさんもお家へ帰るのね。」等々、孫と主人との楽しい会話がどんどん増え、日々の孫の変化に疲れも吹っ飛び、お陰様で五、六歳は若返つたと、今でも信じています。

平成九年二月には、孫涉の隠岐での出産。友香

は保育所に、私は学校への生活。平成十一年三月の定年退職を迎えるまで、震災・孫の誕生・育児・勤務と四重の生活。しかし、心はいつも充実していました。

人間って時間や心の余裕が無くても心の持ちよう、想像もつかない力が湧き出るものと、改めて確信しました。

その孫達も、もう大学生と高校生。そして内孫の穂萌も中学生、いよいよ私も後期高齢者。退職後に小中学校での書初指導のボランティア、体力づくりの卓球、趣味を生かしたダンスにと、まだまだ動ける自分を再発見。

その源は、平成七年一月十七日に発生した、阪神淡路大震災がもたらした様々な体験を通し、困難を身をもって乗り越えた精神力と体力にあると、感謝しつつ当時を静かに回想する今日此の頃です。



山口県

☆☆第二六回親睦交流総会の報告☆☆

事務局長 小峰 義郎

かなめ会親睦交流総会は第二六回を迎え、去る十月一六日(木)・一七日(金)に歴史と文化のまちである柳井市の柳井クルーズホテルにおいて開催されました。

ここは柳井市の東に位置し、ホテルの窓からは柳井市が一望でき、遠くには柳井港も眺望され素晴らしい会場でした。このような会場をご配慮して頂いたことに参加した会員一同感謝しております。

今回は第二地区(柳井・大島・熊毛)の引き受けで、昨年から一年をかけて準備をされ、素晴らしい総会になるように第二地区の会員の方々が協力し合い努力したそうです。「笑顔でおもてなしを」をモットーに手厚いご配慮と心温まるお迎えを頂きました。お蔭で参加した会員五一名は和やかな気持ちになつたと思います。来賓として山口県



公立学校教頭会会長上田良夫教頭先生(防府市立富海中学校)のご臨席をいただきました。ご祝辞の中で現在の学校運営の大きな柱に県教育委員会も市教委も「学力の向上」を挙げておるのが現状だと話されました。

総会会場には、趣味のコーナーが設けられ、絵画・写真・陶芸・木彫・パッチワーク・歴史書・工作等多くの作品が展示されました。どれも素晴らしい作品で、会員の皆さんは、その素晴らしさに感動しておりました。

総会の前に生涯学習の一環として文化講演「瀬戸内の未来を拓くサンゴ」(周防大島沖に群生するニホンアワサンゴ)にける夢」と題して藤本正明先生の講演を拝聴いたしました。

かなめ会親睦交流総会を終えて

二地区 谷 茂子

心配された台風も過ぎ、秋晴れの好天気にも恵まれたかなめ会交流総会。

私たち第二地区会員は、笑顔でのおもてなしをモットーに皆様をお迎えいたしました。

県内各地から早々と柳井クルーズホテルにお越しいただき、開始時刻の十五分前には五一名全員が到着され私共も一安心いたしました。

時刻に遅れないという日頃の実直な生活ぶりが目に浮かぶようでした。生涯学習の出品作品も早々と持参されるなど、会員の皆様の心配りに感